

デカダンの描くファンタジーにおける自然と人間： 坂口安吾の“桜の森の満開の下”と李箱の“黄牛と鬼”^{トッケビ}の比較を通して

中村優子 立教大学・院

坂口安吾は1906年生まれ。第二次大戦終結の翌年発表された“墮落論”は、戦中の倫理を痛烈に批判して大きな反響を呼び、翌1947年に“桜の森の満開の下”執筆。

李箱は日韓併合条約締結の1910年生まれ。高校卒業後、朝鮮総督府に就職するが4年後に退職。1936年東京に来るものの思想犯として逮捕され、その1ヵ月後、持病の結核の悪化により死去。“黄牛と鬼”は1937年に執筆された、李唯一の童話。

極めて退廃的な私生活を送りつつ、既存の枠組みに囚われない斬新な作品を発表し続けた2人。彼らが育ったのは、日韓両国共、西洋近代化が推進された時代だったが、そこには常に戦争の影があった。本稿は、このハイ・モダニズムの時代を代表する2人のファンタジー作品の中に描かれる自然観を浮き彫りにすることで、日韓の近代化観の差を探る試みである。

1. 坂口安吾の“桜の森の満開の下”の場合

「大昔は桜の花の下は怖いとは思っても、絶景だなどとは思いませんでした。[略]桜の花の下に姿がなければ、怖いばかりです。」(坂口 69)戦後すぐに発表した“桜の森の満開の下”の冒頭、坂口は近代日本が作り上げてきた桜の意味、すなわち、美しく、潔い日本の国民性の象徴というシニフィエを、「怖い」という言葉で反転させた。植物を利用して、人間の思考を操作し、戦場に送り込んで行く国家イデオロギーの暴力性を暴こうとしたのだ¹。その意味でこの作品は、冒頭から、もはや近代日本が突き当たってきた自然と人間との「不健全な関係」を暗示させるものだと考える。

主人公の山賊は、外見は人間だが内面的には野生である「獣人」で、人を殺しても罪の意識がない。これは「動物は無感覚で、非理性的な機械」としたデカルト的自然観²に近いが、あくまで自然界の掟に従っているという描き方だ。山賊はある日、いつもどおり追剥ぎをするが、その連れの女の美しさに魅入られる。それまで山賊にとって女は、弄ぶための「モノ」だったが、この女だけは違った。動物が人間に飼い馴らされるように、男は次第に女のいいなりになって行く。男が「獣」、女が「人間」の象徴であるのを色濃く物語るのが、男が女を連れて初めて自分の棲む山へ向かう場面である。

「これだけの山という山がみんな俺のものなんだぜ」[略]

「いいかい。お前の目に見える山という山、木という木、谷という谷、その谷からわく雲まで、みんな俺のものなんだぜ」

「早く歩いておくれ。私はこんな岩コブだらけの崖の下にいたくないのだから」(坂口 71)

「獣」である男にとって、自分の縄張りが広いことは、「野生としての能力の高さ」の象徴³だが、人間である女にとっては無価値である。ここに近代以降の人と自然との関係の断絶の姿が描かれている。

女は山の生活を嫌い、男を伴い都へ移住する。だが都住いで男を待っていたのは、女の果てしのない「首遊び」⁴への欲望であった。坂口は、近代がもたらした都市化が人間を自然環境と切り離し、必要な生態系のサイクルから除外して、不必要な殺戮の欲望(=戦争)に目覚めさせたと主張していると考ええる。

「獣」である男は徐々に、女(=「人間」)の殺人ゲーム(=「首遊び」)の日常に辟易し、ついに女と別れて山へ帰ろうとする。女と一緒に山に帰ると言うので⁵、男は女を背負い恋しかった山を歩き幸福感に満たされる。しかし満開の桜の森に差掛ると女は鬼と化し、男の首を絞めて来たので、男は思わず首を絞め返して殺す。我に返ると、今まで味わったことのない感情が男を襲う。

彼はワッと泣きふしました。[略]頭上には花がありました。その下にひっそりと

註

¹ 小川はその著『桜と日本人』で、坂口が『桜の森…』で描こうとしたものは焦土・東京に「跳梁する怨霊」(小川 122)だったと主張する中で、多くの作品論が「軍国の花としての桜を否定するところに、『墮落論』の直線上にある坂口安吾の文学的姿勢がある」(小川 122)という立場を取っていることを示唆している。

² Environmental Information & Communication Network の「デカルト的自然観」ページにある定義に基づく。

³ Hediger, Heini の“The evolution of territorial behaviour”を参考にした。

⁴ 女は殺した人間の生首を使って人形遊びのようなことをするのがこの上なく好きである。一つの首では飽き足らず、あれやこれやと様々な人間の生首を自分の遊びの道具にした。

⁵ 「首遊び」が自分の命の糧のようにしている女は、人を切って首をもたらししてくれる男とはなれるわけには行かない。都へはねだればまですぐ帰って来られると思い、山と一緒に帰ることを申し出る。

無限の虚空がみちていました。[略]ほど経て彼はただ一つのなまあたかな何ものかを感じました。そしてそれが彼自身の胸の悲しみであることに気がつきました。(坂口 86)

満開の桜は、大戦中、日本国民を殺人マシンに変貌させた国家イデオロギーの「群集シンボル」⁶である桜花を表し、その下を通り鬼へと豹変して殺される女は、その美しく記号化された国家イデオロギーに踊らされた日本国民を象徴していると考えられる。

2. 李箱の『黄牛と鬼』の場合

“黄牛と鬼”の主人公トルスエは、薪売りで生計を立てている。薪を背に乗せて町まで運ぶ黄牛は、トルスエの生活に欠かせない。「トルスエにはその黄牛が何よりも大切な財産でした」(李 101)(引用者傍点)という一文には、家畜を資産価値を持つ“モノ”とみなす、李のキリスト教的自然観に基づく人間中心主義⁷が伺える。

いつも通り邑に薪を売りに行った帰り道、魔力が衰え、飢えと寒さでげっそりした鬼の子と出会ったトルスエは気の毒に思い、大事な黄牛の腹に、春までの2ヶ月間だけの避難を願う鬼の子の頼みを聞くべきか悩む。「私がこの牛のお腹の中に入っている間はこの牛の力を今よりも十倍強くしてさしあげます」(李 105)との交換条件の提示に、トルスエは「牛の背中を叩いて『どうしたらいいかい』と訊」(李 105)くが、了解したと勝手に解釈し、承諾する。こうした動物の行動を人間の思い込みで操作する発想、また、鬼の子が入った黄牛が約束通り強大な輸送力を備えたため、トルスエは「歩いてはとうていついてゆけないので新しくクルマを一台買」(李 106)うという設定にも、動物と車を等価に見る李のキリスト教的自然観が表れている。

約2ヶ月が経った朝、目を覚ますと、牛は「脂汗をいっぱいにかいて首を振り続け、疲れきった様子」(李 108)をしている。仰天したトルスエに、鬼の子が腹の中から、2ヶ月間の休養で太ったため、牛に大あくびをさせなければ出られないと言い、トルスエはあれこれ試すが万策尽きる。「黄牛も己の身の上を悟ったのか、またはトルスエの心中を察したのか、重たく大きな体を揺り動かしてはやはり悲しそうにトルスエの顔を見つめ」(李 111)る。涙が枯れるほど泣いた末に、黄牛を見つめ頭がぼうつとしたトルスエがあくびをすると、牛も大あくびをし、無事に鬼の子は牛の腹から出てくる。鬼の子は助けてもらった礼に、牛に百倍の力を与えて去って行く。

3. 2作品の共通性と差異

両主人公とも山で暮らす民。自由で、生活に不満がないという描き方からはロマン主義的⁸発想が見える。またどこか子供のような無垢な存在として描かれている点でも類似が見られる⁹。自然界を穢れのない世界と見るパストラリズム的視点は、そのイメージを自然と共に暮らす人々にも投影させがちであるが、この2作品も「山＝自然＝無垢＝自然と共に暮らす人々」という認識の基盤があると考えられる。

以上のように、物語の状況設定やキャラクターづくりでは、2作品ともロマン主義的自然観が見られる。しかし、文章から滲み出るメタメッセージとしての2人の作者の自然観は好対照を成す。

李の作品には、やはりキリスト教的自然観とそれに基づく人間中心主義が表れていると言える。「かわいそうであればお化けでも助けて」(李 112)やるのが人間だと最後にあるが、その思いやりとは、実は人間の管理下にある生き物(黄牛)の犠牲の上に成り立っているという自覚がない。また、牛が何十倍、何百倍の力を備えることに喜びを見出す主人公からは、李の西洋近代を賛美するモダニズムの姿勢が伺える。

これに対して坂口の作品からは、近代批判、そしてそれをベースとする自然賛美のロマン主義的自然観が通底していると言える。人間の象徴である女は、野生の象徴である男に無駄な殺戮を強要する悪として描かれる。自然から乖離し、マテリアリズムに魅入られ、欲望を肥大させる近代以降の人

⁶ カネッティ、エリアス(1971).『群集と権力 上』にある定義を採用。

⁷ 高田純(2005)の定義を採用した。

⁸ ロマン主義は Merriam-Webster Online Dictionary の以下のものを定義として採用することとする。

a literary, artistic, and philosophical movement originating in the 18th century, characterized chiefly by a reaction against neoclassicism and an emphasis on the imagination and emotions, and marked especially in English literature by sensibility and the use of autobiographical material, an exaltation of the primitive and the common man, an appreciation of external nature, an interest in the remote, a predilection for melancholy, and the use in poetry of older verse forms

⁹ 李のトルスエの場合、「食べる物のあるうちはぶらぶらと遊び」という表現、坂口の山賊も、女が髪を梳くのを眺めているシーンで「男は子供のように手をひっこめて、てれながら」といった形容を施されている。

間に対する批判的視点と言える。

以上のように、この2作品で両作家はそれぞれの自然観を表出させているが、これは同時に、2人にとって近代化がいかなるものであったかを見る窓であると言えよう。李にとって近代化はやはり善で、坂口にとっては悪と映っていたと思われる。朝鮮総督府に勤め、来日までした李は、日本を通して欧米を憧憬しており、一方、敗戦を経験してこの作品を書いた坂口は、近代化に何らかの喪失を見ていたと考えるのは妥当である。近代化への視点の差が、日韓のモダニズムの旗手の自然観の差に投影されたと考える。

参考文献

李箱「黄牛と鬼(トッケビ)」1937『李箱作品集』崔真碩・編訳、作品社、1937. 101-113.

小川和佑『桜と日本人』新潮社、1993

坂口安吾「桜の森の満開の下」1947『日本の文学 63』中央公論社、1969. 69-87

高田純「自然中心主義と人間中心主義.」『環境思想キーワード』尾関周二、亀山純生、武田一博・編. 青木書店、2005. 80-81.

Merriam-Webster Online Dictionary. 2007. 2007年4月2日

<<http://www.m-w.com/dictionary/Romanticism>>.

「デカルト的自然観」 Environmental Information & Communication Network. 2005.

2007年4月1日 <<http://www.eic.or.jp/ecoterm/?act=view&serial=1830>>.

カネッティ, エリアス「群集と権力 上」岩田行一・訳. 法政大学出版局. 1971.

Hediger, Heini. “The evolution of territorial behaviour.” ed. Washburn, Sherwood・L., . Social Life of Early Man. London: Routledge, 1962. 34-57.